

VonnegutのCat's Cradle について

野口, 健司
九州大学言語文化部

<https://doi.org/10.15017/5379>

出版情報 : 言語文化論究. 6, pp.111-118, 1995-03-10. 九州大学言語文化部
バージョン :
権利関係 :

Vonnegut の *Cat's Cradle* について¹

野口 健 司

Cat's Cradle は“Call me Jonah”で始まります。ただちに想起されるのが、『白鯨』の“Call me Ishmael”です。更に、この物語の主要舞台となるサン・ロレンゾ島の最高峰であるマッケーブ山は鯨にたとえられています。

It was in the sunrise that the cetacean majesty of the highest mountain on the island, of Mount McCabe, made itself known to me. It was a fearful hump, a blue whale, with one queer stone plug on its back for a peak. In scale with a whale, the plug might have been the stump of a snapped harpoon… (142)

明らかに、『白鯨』の語りのパロディがこの小説の語りの枠組みになっています。ただひとり奇跡的に生還したイシュメイルがピークオド号の悲劇を語るのと同じように、語り手のジョンは *ice-nine* による地球の破滅を語ります。

ice-nine とは114.4°F (45.77…°C)を融点とする特殊な氷で、この氷に觸れた水分はたちまち *ice-nine* となって凍結してしまいます。生命の組成分は、その殆どが水分であることを考えるとき、これがいかに危険な物質であるかは容易にお分りになると思います。

ice-nine はノーベル物理学賞の受賞者であるホェニカー博士によって発明されます。博士は原子爆弾の発明者でもあります。*ice-nine* 研究のきっかけは海兵隊の将軍によ

て与えられます。米国海兵隊は創設以来の200年の間湿地帯での戦闘に苦しめられています。將軍は湿地を瞬時にコンクリートのように固めてしまう物質はないものかと、ホェニカー博士に訴えます。その訴えがヒントとなって、常温で安定した氷、すなわち *ice-nine* が生まれます。

博士の死後、遺されたアンゼラ、フランク、ニュートンの3人の遺児は、彼等の中で *ice-nine* を分けます。その後3人には各方面から誘惑の手が伸びます。そして3人は *ice-nine* と引き換えに、それぞれの幸福を得ることになります。その結果 *ice-nine* はアンゼラを通して合衆国政府に、フランクを通してサン・ロレンゾ国に、ニュートンを通してソ連の手に渡ります。

ice-nine を手にしたサン・ロレンゾ国の独裁者であるパパ・モンザーノはガンの末期症状で苦しんでいます。その苦しみから逃れるために、*ice-nine* を飲んで自殺を図ります。すると全身がたちまち弓なりに硬直し、*ice-nine* の氷像と化してしまいます。当日は第2次大戦の戦死者慰霊祭の日です。大統領の死は伏せられたまま、式典が挙行されます。そして、その式典の行事として爆撃演習を行っていた戦闘機が、爆弾を装填したまま海に面した宮殿に撃突し、爆発するという事故が起きます。崩れ落ちる宮殿と共に、安置されていたパパ・モンザーノの死体も海に落下します。海は *ice-nine* と化し、無数の龍巻が発生します。このようにして地球上の生命は終末を迎えることになります。

ice-nine による地球の汚染が始まり、陸地も海も青白い *ice-nine* の結晶によって覆われたなかで、奇跡的な生存を続けるジョンとその仲間の小数の者には、奇妙に静かな6か月の月日が訪れます。サン・ロレンゾ島の宗教であるボコノン教へと回宗したジョンは、その6か月の間にボコノン教の視点から、*ice-nine* による地球破滅についての記録を書き上げることになるのです。

元々ジョンはフリーのジャーナリストとして、*The Day the World Ended* というルポルタージュを書くために、原子爆弾が広島に投下された日の原爆発明者の言動について取材を続けていたのですが、その過程で *ice-nine* の悲劇に大きく関与することになります。

ボコノン教によれば、人間はそれぞれ *karass* というチームに編成され、神の意図の実現に努めています。もっとも、自分達が何を実現しようとしているのかは、人間に分る筈がありません。語り手のジョンは次のように説明しています。

We Bokononists believe that humanity is organized into teams, teams that do Gad's Will without ever discovering what they are doing. Such a team is called a *karass* by Bokonon, and the instrument, the *kan-kan*, that brought me into my own particular *karass* was the book I never finished, the book to be called *The Day the World Ended*. (11)

『世界が終わった日』はジョンをその所属すべき *karass* に編入するための手段だったので。更に、それぞれのチームすなわち *karass* には、その行動の軸となるべきものがあり、それは *wampeter* と呼ばれます。

Awampeter is the pivot of a *karass*.

No *karass* is without a *wampeter*, Bokonon tells us, just as no wheel is without a hub.

Anything can be a *wampeter*: a tree, a rock, an animal, an idea, a book, a melody, the Holy Grail. Whatever it is, the members of its *karass* revolve about it in the majestic chaos of a spiral nebula. The orbits of the members of a *karass* about their common *wampeter* are spiritual orbits, naturally. (42)

また *karass* には常に二つの *wampeter* があります。ある任意の時点をとれば、そのうちの一つは勢力を増しつつあり、他の一つは衰えつつあるとボコノン教は説きます。語り手のジョンは、ホェニカー博士のことでその上司のブリード博士にインタビューを行い、始めて *ice-nine* のアイデアを耳にしますが、その時こそまさに *ice-nine* が自分の *wampeter* として開花しつつあったことに思い当ります。

...I am almost certain that while I was talking to Dr. Breed in Ilium, the *wampeter* of my *karass* that was just coming into bloom was that crystalline form of water, that blue-white gem, that seed of doom called *ice-nine*. (43)

ホェニカー博士とその3人の子供であるアンゼラ、フランク、ニュートンはジョンの *karass* のメンバーであり、その *wampeter* は *ice-nine* であります。ボコノン教によれば、*ice-nine* による地球の破滅は神の壮大なる意図の一環ということになります。もしそうであれば、人類はその破滅に対して免責を与えられることになります。ホェニカー博士とその家族に代表される人類の愚かさに絶望するジョンはボコノン教に慰めと救いを求めま

す。

“What hope can there be for mankind,” I thought, “when there are such men as Felix Hoenikker to give such playthings as *ice-nine* to such short-sighted children as almost all men and women are?”

And I remembered *The Fourteenth Book of Bokonon*, which I had read in its entirety the night before. *The Fourteenth Book* is entitled, “What Can a Thoughtful Man Hope for Mankind on Earth, Given the Experience of the Past Million Years?”

It doesn't take long to read *The Fourteenth Book*. It consists of one word and a period.

This is it:

“Nothing.” (164)

更に、教祖ボコノンには次のように説いています。

“History!” writes Bokonon. “Read it and weep!” (168)

ジョンがボコノン教に帰依した動機は人間の愚かさへの目覚めであります。その愚かさの典型は、原子爆弾や *ice-nine* のような恐しいものを発明する科学者の無邪気さ、つまり研究の成果に関する倫理的意識の欠如にみられます。そのような科学者の象徴的存在がホェニカー博士であります。例えば原爆の爆発実験が始めて成功し、1個の爆弾で一つの都市のすべてを消滅させてしまうことが証明された日のことです。ある科学者が博士に向って、科学はついに罪を犯しましたねと述べると、それに対して博士は『罪の概念など今では甲冑同様にすたれてしまったものの如

く』² “What is sin?” (21) と問いかけます。またこの原爆が実際に広島に投下された日のことです。博士はそのことには全く関心がなく、一人であや取りに興じています。更に、オイル暖房は止まり、パイプは凍結し、自動車のエンジンはかからないといった寒い冬の朝のことです。そのような朝は、母のエミリーが亡くなって以来、母親の代りを務める長女のアンゼラにとっては大変な忙しさです。そのような慌しさのなかで、困っている家の者のことにはいささかの関心も示さないで、博士は突然言い出します。

I wonder about turtles...when they pull in their heads...do their spines buckle or contract? (20)

亀といえば、博士が一時亀のことに余りにも熱中し、原爆の研究がお留守になったことがあります。マンハッタン計画の係官は困り果ててアンゼラに相談し、ある晩亀を盗み出してしまいます。博士は亀がいなくなったことには一言も觸れず、翌日マンハッタン計画に復帰します。その時の事の次第は次のように表現されています。

He just came to work the next day and looked for things to play with and think about, and everything there was to play with and think about had something to do with the bomb. (20)

次の引用はホェニカー博士がノーベル賞受賞の際に行ったスピーチの全文です。

Ladies and Gentlemen. I stand before you now because I never stopped dawdling like an eight-year-old on a spring morning on his way to school. Anything can make me stop and look and wonder,

and sometimes learn. I am a very happy man. Thank you. (17)

この博士自身の言葉にもみられるように、博士は純心無垢な、好奇心にあふれた幼な児の心を持った科学者であります。博士は幼な児が玩具とたわむれるが如く、様々な想念と、思考と実験を通してたわむれるのです。しかし問題は、自分の研究の道義的責任に関しては全く無感覚な科学者の無邪気な研究によって、核兵器や *ice-nine* のような人類の破滅に直結する恐い武器が生み出されることです。更に困ったことには、その研究の成果が博士の3人の子供に代表されるような愚かな人類の手に委ねられてしまうことです。

ice-nine が、3人の子供を通じて、世界の権力者の手中に拡散することは前に述べましたが、その経緯を述べれば人間の愚かさぶりが更にお分りになると思います。まずアンゼラの場合です。父の死後寂しさに苦しむアンゼラをある日、かつて父の助手を務め、その後会社を創立したハンサムな青年が訪れます。二人は博士の最後の日々や昔のことを語り合います。その2週間後に二人は結婚します。夫の会社は *ice-nine* という秘密兵器を生産する軍需工場となります。

アンゼラは6尺豊かな馬面の大女ですが、それと対照的にニュートンはこうもり傘の背丈ほどしかない小人です。ニュートンはハイスクールの時巡業中のソ連ボルゾイバレエ団の公演を観に行き、小人のダンサーであるジンカに恋をします。その後コーネル大学に入学したニュートンは、コーネル大学で公演を行ったボルゾイバレエ団の楽屋にジンカを訪ね、二人の仲はジャーナリズムに華々しく取り上げられます。二人は婚約を発表し、ケープ・コッドの父の別荘で愛の1週間を過します。その間にジンカは *ice-nine* を手に入れます。ジンカは1週間のアメリカ亡命を破棄し、ソ連大使館に出頭します。ジンカはソ連のス

パイだったのです。

ice-nine を餌として、サン・ロレンゾ国の高官に納まるのがフランクです。フランクは幼い頃から模型造りの天才です。近所のホビー・ショップで最ら模型造りに専念していたフランクは父の葬儀の直後に町を出て、フロリダの模型店に雇われます。しかしその店は模型店とは名ばかりで、実は高級車を盗んでキューバに密輸するギャング団のアジトです。そのことが判明し、フランクもその一味としてFBIの指名手配を受けます。しばらく消息不明であったフランクはその後、キューバを出港した豪華な遊覧船でカリブ海を巡航中に遭難し、ただひとりサン・ロレンゾ島に漂着します。サン・ロレンゾでは高名なホェニカー博士の子息ということで厚遇され、科学と進歩担当の大臣の要職に就き、次期大統領に目されています。また、モンザーノ大統領の養女で、サン・ロレンゾ随一の美女であるモナの婚約者になります。フランクに破格の待遇を与えたパパ・モンザーノの胸を飾るネックレスのロケットには、フランクから献上された *ice-nine* が納められています。

ブリード博士から *ice-nine* の話しを聞いて以来 *ice-nine* の悪夢に悩まされていたジョンは、パパ・モンザーノの自殺とそれに続いて起った侍医のフォン・ケーニヒスヴァルトの死によってその恐怖の実態を体験し、またホェニカー博士の子供達から聞いた話しによって、前述のような *ice-nine* の分配とその後の行方について知ります。たとえパパ・モンザーノの自殺がなくても、また戦闘機の墜落事故がなくても、地球の破滅は必然的な成り行きであったことを思い、ジョンはボコノン教への帰依を深めてゆきます。

ジョンがボコノン教に始めて接するのは、サン・ロレンゾ島へ向う機中のことです。現代のシュバイツァーといわれるカースル博士の取材旅行をある雑誌社に依頼され、ジョン

はサン・ロレンゾ島へ向います。たまたま相席となるのが、サン・ロレンゾ駐在大使として任地に向うアメリカの外交官です。その外交官から、カースル博士の息子のフィリップが書いた『サン・ロレンゾーその国土、歴史及び国民一』という書物を借用し、ボコノン教のを知るのです。それからこの飛行機には、フランクの婚約パーティのためにサン・ロレンゾに向うアンゼラとニュートンも同乗しています。

ボコノン教の教祖の正式名はライオネル・ボイド・ジョンソン (Lionel Boyd Johnson) です。ジョンソンをサン・ロレンゾの訛りで発音するとボコノンとなるのです。ボコノンはトバゴの裕福な黒人家族に生まれます。ボコノン家の富はボコノンの祖父が海賊黒ひげの埋蔵財宝を発見したことに由来します。英国国教会派のクリスチャンとして育てられたボコノンは、成長すると、淑女のスリッパという風変りな名前の自家用スループ船でロンドンへ出かけ、高等教育を受けます。しかし第一次大戦の勃発によってその学業は中断され、ボコノンも歩兵として参戦します。毒ガス攻撃を受けて負傷して除隊となり、淑女のスリッパ号で帰路につきます。しかしその途中では、ドイツ海軍の潜水艦に捕えられたり、その潜水艦が更にイギリス海軍の駆逐艦に捕獲されたりと波乱の体験を重ねることになります。結局北米のロードアイランド州のニューポートにたどり着き、そこで終戦を迎えます。ニューポートではラムフォード家の知己を得て土地の有力者と交ります。その後ラムフォード家が所有するセヘラザード号の船長として世界漫遊の航海に出ます。しかしセヘラザード号は霧のボンベイ港で衝突事故のために沈没し、ボコノンだけが助かります。インドには数年間滞在し、その間にはガンジーの信奉者となって独立運動に参加をし、その結果投獄されるなどの体験をします。刑期を終えてトバゴに帰国します。

ボコノンがサン・ロレンゾ国の初代大統領となるアール・マッケーブと出会うのは、淑女のスリッパ二世号でカリブ海を漫遊中にハリケーンに遭い、ハイチの港に避難をした時のことです。当時ハイチは米国海兵隊の占領下であり、海兵隊を脱走したマッケーブはマイアミまでの乗船を求めます。しかし、マッケーブを同乗させた淑女のスリッパ二世号は、マイアミに着く前に嵐のために遭難します。二人は救命ボートで辛うじて助かります。二人が漂着した島がサン・ロレンゾ島です。1922年のことです。

二人が漂着した時、サン・ロレンゾの島民の暮しは着のみ着のままの二人よりももっと貧しいものでした。二人はサン・ロレンゾ島に理想境をつくることを夢想し、島の支配者となることを宣言します。その時島を支配していたカースル砂糖会社は、生産性の低いその島からあっさりと撤退します。理想境を実現するために、マッケーブはサン・ロレンゾの政治と経済の全面的な改革に着手します。ボコノンはキリスト教の僧侶を追放し、新しい宗教を創めます。ボコノンは新宗教創立の心境を土地の民謡のカリプソに託し、次のように謡っています。

I wanted all things
To seem to make some sense,
So we all could be happy, yes,
Instead of tense.
And I made up lies
So that they all fit nice,
And I made this sad world
A par-a-dise. (90)

しかしいかなる制度の改革も、民衆をみじめな境遇から救い出すことには、一向に役に立ちません。宗教のみが人々を幸せにするための唯一の手段であることが明らかとなります。生活の実態が余りにもみじめであるため

に、真理は『民衆の敵』(118)となるのです。そこでポコノンにはますます上手なうそをつくことによって、民衆に希望を与えることに努めます。更に、ポコノンは新宗教に対する民衆の信仰に真の生命と情熱を与えるために、ポコノン教を禁制とすることをマッケープに要請します。ポコノン教は禁制となり、その信者であることが分れば、腹部をフックという大きなカギ針で貫かれて吊される極刑を受けることとなります。マッケープは独裁者としてサン・ロレンゾ国に君臨し、追放されたポコノンはジャングルの聖者として民衆の心を支配することとなります。

ポコノン教の教義の要諦は上述のことからも分るように *foma*, すなわちうそであります。一例を示せば、ポコノンは太陽系の誕生について次のような面白い教義を展開しています。

…*Borasisi*, the sun, held *Pabu*, the moon, in his arms, and hoped that *Pabu* would bear him a fiery child.

But poor *Pabu* gave birth to children that were cold, that did not burn; and *Borasisi* threw them away in disgust. These were the Planets, who circled their terrible father at a safe distance.

Then poor *Pabu* herself was cast away, and she went to live with her favorite child, which was Earth. Earth was *Pabu*'s favorite because it had people on it; and the people looked up at her and loved her and sympathized. (129-30)

そして、この宇宙進化論に対するポコノン自身の見解は次の通りです。

Foma! Lies!…A Pack of *foma!* (130)

ポコノン所有のスループ船が淑女のスリッ

パという奇妙な名前を持っていたことには前に觸れましたが、ポコノンは足にこだわります。ポコノン教では足は聖なるものです。ポコノン教の最も聖なる儀式のひとつとして *bokomaru* というものがあります。二人の信者が相対して両足の裏をそれぞれ相手の足の裏と合わせる姿勢をとり、お互いに相手の足裏を押し合うことによって二人の魂を融合させ、法悦の境に至るというものであります。ポコノン教徒となった語り手のジョンは次のように説明しています。

We Bokononists believe that it is impossible to be sole-to-sole with another person without loving the person, provided the feet of both persons are clean and nicely tended.

The basis for the foot ceremony is this “Calypso”:

We will touch our feet, yes,
Yes, for all we're worth,
And we will love each other, yes,
Yes, like we love our Mother Earth.

(109)

足の裏 (sole) を同音異義の心 (soul) に掛けるなど、ヴォネガット特有の露骨な冗談もみられますが、ここには、ポコノン教において最も聖なるものが、人と人との愛であることが示されています。しかし、この愛が神の恩寵として祝福されないところにポコノン教の特質があります。ポコノン教を弾圧する政府の高官でありながら実はポコノン教徒であるフランクは、語り手のジョンに問われて、ポコノン教徒にとって最も聖なるものは神ではなく人間であると答えます。

“What is sacred to Bokononists?” I asked after a while.

“Not even God, as near as I can tell.”

“Nothing?”
 “Just one thing.”
 I made some guesses. “The ocean? The sun?”
 “Man,” said Frank. “That’s all. Just man.” (143)

更に、地球の破滅に立ち合うことになったボコノンには、執筆中のボコノン教の聖典、*The Books of Bokonon* の最終章を次の文で結びます。

If I were a younger man, I would write a history of human stupidity; and I would climb to the top of Mount McCabe and lie down on my back with my history for a pillow; and I would take from the ground some of the blue-white poison that makes statues of men; and I would make a statue of myself, lying on my back, grinning horribly, and thumbing my nose at You Know Who. (191)

ボコノンによれば、人間は神の意図の実現のために利用される道具にすぎないのです。そして、その意図が何であるのかについては、人間には推し測る術もないのです。神と人間との間には明らかに断絶があります。人間の愛を育むためにボコノンに残された道は、ただより上手なうそをつくことだけです。この宗教観は、1970年にベニントン大学の卒業生に対して与えたヴォネガットの次の言葉と見事に重なります。

I know that millions of dollars have been spent to produce this splendid graduating class, and that the main hope of your teachers was, once they got through with you, that you would no longer be superstitious. I’m sorry—I

have to undo that now. I beg you to believe in the most ridiculous superstition of all: that humanity is at the center of the universe, the fulfiller or the frustrator of the grandest dreams of God Almighty.³

ボコノン教とは一言でいえば人間を幸せにするための迷信です。絶望的な状況のなかで人間に希望を与え、生きる力を与えてくれる迷信です。フィリップのサン・ロレンゾの紹介書で始めてボコノン教に関心を持ったジョンは、その後フランクが所有していた『ボコノンの書』を熟読し、ボコノン教徒となります。そして多年にわたり『世界が終わった日』というノン・フィクションを書くために取材を続けてきたジョンは、皮肉にもサン・ロレンゾ島で地球の最後を体験し、ボコノン教徒として、その記録を遺すことになるのです。

このようなジョンを語り手とする『ネコのゆりかご』が執筆されたのは1962年のキューバ危機の時代であります。米・ソの対立による核戦争の脅威が一觸即発の極限にまで高まった時です。ヴォネガットは1969年にニューヨークで開催された物理学学会に講演者として招かれ、作家の役割について次のように述べています。

I have taught creative writing. I often wondered what I thought I was doing, teaching creative writing, since the demand for creative writers is very small in this vale of tears. I was perplexed as to what the usefulness of any of the arts might be, with the possible exception of interior decoration. The most positive notion I could come up with was what I call the canary-in-the-coal-mine theory of the arts. This theory argues that artists are useful to society because they

are so sensitive. They are supersensitive. They keel over like canaries in coal mines filled with poison gas, long before more robust types realize that any danger is there.⁴

は科学の万能を信じる人間の愚かさに対するヴォネガットの警告であります。『ヨナ書』のニネベの町は悔い改めることにより神の破壊を免れますが、人間がその愚かさを改めない限り、地球は必ず破滅の日を迎えることをヴォネガットは警告しているのです。

『私をヨナと呼べ』で始まる『ネコのゆりかご』

- 1 本論は1994年7月9日、九州アメリカ文学会7月例会で発表したものに加筆を行ったものである。Cat's Cradleからの引用はKurt Vonnegut Jr., *Cat's Cradle* (New York: Dell Publishing, 1963)。引用箇所はかっこ内に示す。
- 2 Kurt Vonnegut Jr., *Wampeters, Foma & Granfalloon* (New York; Delacorte Press/Seymour Lawrence, 1974), 97.
- 3 *Wampeters, Foma & Granfalloon*, 163.
- 4 *Wampeters, Foma & Granfalloon*, 92.